

★——プロローグ

「この子が男の子なら『優歩』ゆうほ、女の子なら『優迅』ゆうじんにしよう

「優歩、優迅……」

「ああ、この名前を子供につけたかったんだ」

「ふふっ、何か特別な意味でもあるの？」

「まあな」

「そっか。優歩、優迅……この子はどっちになるかな」

「さあ。生まれてみないとわからない」

「……願わくば、この先の未来が争いのない世界でありますように」

「ああ……そうだな」

きき

がたがたと、列車が揺れている。その振動に合わせて、少女の体も小刻みに左右へ揺れていた。心地よい振動に少女は目を閉じるが、眠気は全くやってこない。

少女は諦めて、窓ガラスに目をやった。外は闇、照明の一つもない、まるで真っ暗な空間に閉じ込められているかのように、そこには人工的な闇が広がっていた。

コンコンつと窓ガラスを叩く。しかし、当然ながら何も反応はない。そこには少し不満げに頬を膨らませる少女の姿だけが映っていた。

「うーん、退屈」

列車の中には少女一人しかいない。試しに、他の車両にも行ってみようと思ったが、扉自体が開かなかった。

「まあ、ただの列車じゃないもんね。運悪く、開いてどこかに落ちちゃったら大変だし」

——彼女は今、過去へ向かっている最中なのである。

未来から過去へ行く瞬間、本人が普段から想像しているものが具現化されるといふ。彼女が想像したのは、この列車だったのだ。年代的に見て、この移動は後1時間程と思われる。

それでもやはり、流れる風景もなく、ただじつとそれだけの時間を過ごすのは、この少女にとって苦痛以外の何でもなかった。

「あー、だめだめ。優迅、ため息はだめだ。死に行くわけじゃないんだから、しつかり」

彼女は自身を奮い立たせるかのように、頬をつまんだ。そして、窓ガラスに向けておどけた顔を映す。ほんの少し、口元が緩くなった。

彼女が向かうのは、自身が生まれる15年以上前の時代。不安が付き纏うのは当然だった。そして、もう一つ。彼女の心に陰を差している理由がある。

「……ママ、心配してるかな」

ふと、不安げな言葉が彼女の口元から零れた。誰もそれに返す者はいない。揺れる列車が先ほどと変わらず、がたがたと音を立てているだけである。

がたがた、がたがた。

どれくらいの間が経った頃だろうか。無機質な闇に包まれていた列車内が、突然強烈な光に包まれた。本能的に少女は両目を瞑る。しかし、列車はなおも光に包まれ、それと同時に揺れも激しくなっていた。

やがて、シューツと蒸気が抜ける音がすると、少女は列車が動きを止めたことに気が付いた。

「着いたの？」

少女は傍らの荷物を胸元に抱えると、恐る恐る列車の扉を開けた。先ほどはビクともしなかつた扉は、すんなりと横にスライドし、少女は地面へと降り立つ。瞬間、扉は勢いよく閉じ

られ、再び開くことはなかった。

「……門？」

少女の目の前には、非常に大きな分厚い門があった。おそらく、この門を開かなければこの先に行くことはできないのだろう。すぐにそれを理解した彼女は、荷物を足元に置くと、簡単な準備運動を行い、じつとその門を睨んだ。

「よしっ」

少女が門の取っ手に手をかける。そして、力いっぱい右へ押し出した。

キイイツツツ

古臭い音と共に門が開く——と、同時に再び少女の視界は凄まじい光に包まれた。

「きゃああああ」

甲高い悲鳴の後、少女はぼんやりと辺りを見回した。

それは一瞬の出来事だった。

少女はぐるりと辺りを一周する。しかし、そこには彼女が乗ってきた列車はなく、いつのまにか彼女はどこかの街と思われる場所に立っていた。

「今度こそ、本当についた」

少女はぽかんと口を開けていたのも束の間、次の瞬間には余りの嬉しさに、荷物を抱えたまま辺りを走り回っていた。

「うわ、着いた!!すごい、すごい!!本当に過去に行けた!!」

しかし、数秒後。少女はぱたりと、その動きを止める。

「……ところで、ここどこ?」

プロローグ完

DAUGHTER

第一話



鈴木優迅

生年月日 6月17日(15歳)
血液型 O型
出身地 千葉県
特術 円周率を120席まで暗誦することができる。
好物 ベルリーナー・プファンクーヘン

Spring Note

鈴木優迅

すずきゆうじん

★
——
襲来「娘」

どこからか蝉の音が聞こえた。彼らは昼夜問わず泣き続けている。呆れるほどに彼らは熱心で、番を探すため、あるいは鳴くこと自体が己に課せられた使命だとも主張しているかのようである。そんな彼らを横目に、男は眉間に皺を寄せながら歩いていく。バス停の前に着くと、1分も経たずに目当てのバスが来たようだ。彼は迷うことなく、空席へと腰掛けた。額にあふれる汗を拭い、ほつと一息。

「明日も授業か……」

彼は頭の中で自身の予定を考えていた。彼にとっては、昔も今も変わらない。これからやる

べきことを決めて、それを遂行する。そして予定通りに事が進んだことに、僅かな満足感を得るのだ。几帳面、真面目。彼を一言で表すなら、そんな言葉がぴったりだろう。

「……こつちに帰ってきて、もう一か月か」

この男——、鈴木聡太はひと月ほど前に日本に帰国したばかりだった。2年間、世界を旅しており、先日やっと復学手続きを済ませたばかりである。

「それにしても、帰国早々何でまた家政婦みたいなことやってるんだか」

鈴木は窓の外を眺めながら、深いため息を零した。この街を後にしてから2年。彼はその2年間を頭の中でゆつくりと回想していた。短いようで、長い。いや、実際彼にとってはとても長い時間だった。

瞬間、彼は思い出したように席を立った。

いつのまにかバスは目的地に到着していたのだ。

バスを降りると、そこは見慣れた風景だった。2年前と何も変わらない景色だ。まあ、昨日も一昨日も通っていたので、当然と言えば当然だ。だが、俺の周囲は少しずつ変化を見せていた。

まず、奏は中学生になっていた。身長も伸び、幼さを残した顔立ちをしているが、明らかに成長を感じられる。そして、ノエルは学校に通っていた。この幼稚園から、以前事件が起こったジェームズ・カイルの邸宅に身を移し、一人暮らしを行っているらしい。もちろん生活費等は先生が出しているが、たまに奏が顔を出しているらしいし、何とかひとりでやっていくようなようだ。きっと彼女も、自身が命拾いしたあの場所を守りたい一心なのだろう。

先生は相変わらず園児の世話をしている。あの事件以降、特にトラブルは起きてないみたいだ。リニアも変わらず、先生の家で居候をしている。つまりは元気だということだ。

葵は――、あの日以降、あいつのことは考えないでいる。考えただけでも、腹が立つてくるからだ。多分、生きてはいるんだろう。いや、死んでいてほしくないだけだ。

この2年間を軽く振り返りながら歩いていると、思わず、俺は吹きつける風に顔を上げた。別に特別意味があったわけではない、ただ何となくこの季節には合わない空気がした。例えるならそう、何か温度のようなものが――、

「気のせい、か」

夕暮れ時、夏の蒸し暑さが一瞬晴れたかのような気がしたのだが。俺は気にすることなく、再び目的地を目指して歩き始めた。

俺が今住んでいるのは、幼稚園の近所のワンルーム。それも先生にお金を少し援助してもらっている。もちろん借りているだけなので、今後返済するつもりだ。幼稚園自体にお世話になってもよかったのだが、奏も思春期の女の子。余計な気を遣わせるのも申し訳ないと思つた結果がこれである。

ふっと、またしても涼しげな、というよりは冷たい風が頬を掠めた。俺は足を止めて、辺りを見回す。特に殺気等を感じたわけではないが、何か奇妙な感じがする。俺は訳も分からず、足を速めた。

予想通り、何かが俺の後を追ってきている。瞬間、俺は勢いよく走り出した。そしてある程度、距離を稼いだところで一気に後ろを振り返る。

「……なんだこれ」

振り返った先には、何故か鞆だけが取り残されていた。しかも、俺が突然足を止めたせいだろう、鞆のチャックが僅かに開いていたようで、中身が盛大に路上に散らばっている。

「はあ……」

俺は額の汗を拭うと、その場に腰を下ろした。何故かこのまま放置して帰るのは、悪い気がしたのだ。

「この鞆、どこのメーカーだ？初めて見るけど。まあ、俺もそんなにブランドとかに詳しくはないか」

俺はぶつぶつと呟きながら、持ち物を鞆に詰めていく。服、お菓子、ノート……に、化粧品。どうやら鞆の持ち主は女性らしい。しかし、持ち主は一向に顔を出す気配がない。近くにいるのは確かなはずだが。

「……何で俺の後を追ってきたか知らないけど、別に何か仕返しするつもりもないから。鞆持って、大人しく家に帰れよ」

返事はない。俺の声が聞こえているのかもわからない。それでもずっとここに立ち尽くして持ち主を待っているわけにもいかないので、俺は早々にこの場を立ち去ることにした。

がたがたと、鈴木の後から異様な音が聞こえる。もちろん彼もその異常性を察知しており、眉間の皺は先ほどから深く刻まれていた。ふっと、彼は汗を拭う動きに合わせて、後ろの様子を伺った。帽子を被った、おそらく10代前半と思われる子供が、じつと鈴木の後を歩いているのが見えたのだ。

もちろん彼に10代の子供、しかも女の子の知り合いは奏以外にいない。彼女の友人だとしても、このように後をつけるのはおかしいだろう。

「……いい加減にしてくれ。何か話があるのか？」

意を決して、鈴木は後ろを振り返った。きつと少女は姿を現さない、鈴木はそう確信していた。しかし、彼が振り返って数秒後。物陰から、大きな鞆を抱えた少女が顔をのぞかせた。

「初対面……だよな？」

一応、確認を行う鈴木だった。事実、彼女の顔は見覚えがなく、協会、あるいは研究所の間、あらゆる可能性を考えたが、彼の脳内ではいずれも正解が導き出せないでいる。

少女は顔を赤らめたまま何も言わない。対する鈴木も、どう声をかけていいのかわからずに

いた。1分、2分、3分、刻々と静寂な時間が流れる。ただでさえ、息苦しい季節だということに、彼らは無言のまま互いを見つめあっていた。

「あの……あのっ!!」

「は、はい!!」

「あの、もしかして鈴木聡太さんですか？」

「え、あ……はい。そうです」

鈴木が答えるや否や、少女は嬉しそうな笑顔を浮かべた。そして、彼に襲い掛かった。

「会えた!! やった!!」

「え……ちよつ、うわっ!!」

鈴木は男の意地でなんとか少女の体を受け止めた。

「よかった!! やっぱり、この人だった!! 合ってた!!」

「え、いや。あのお嬢さんはどちら様ですか？」



思わず丁寧な口調で返す鈴木。彼の両手は宙に浮かべたまま所在なさげにしていた。

相変わらず、少女は笑顔のまま鈴木の上に抱きついている。道行く人々が奇異な視線を向けていた

ふつと少女が顔を上げた。そして、鈴木顔をみつめること約5分。

「えつと……はじめまして？」

すると少女は、帽子を脱いだ。

「未来から来ました。あなたの娘です。鈴木優迅、よろしくおねがいます」

この出会いをきっかけに鈴木は、再び混沌の日々に巻き込まれるのであった。

☆——楽しいバカ

「ちよつと待った!!」

鈴木は自身の体にしがみつくと少女の体を慌てて引きはがした。人通りのある路上で見知らぬ男に抱き着く少女。誰がどう見ても鈴木の方が不審者だと疑われる可能性の方が高い。しかし、少女はそんな彼の態度を面白がってか、引きはがされた体を再び密着させてくる。そして、じつくりとその存在を確かめるように頬を摺り寄せた。

「いや、だから、ちよつと待て!!」

鈴木は非常に困惑していた。現在の状況もそうだが、この少女が先ほど自身に向けて放った言葉の方が衝撃的だった。

『未来から来ました、あなたの娘です』

未来からという意味も、自身の娘だという意味も分からない。鈴木は依然として少女の姿を見下ろすことしかできなかつた。

「あの、えつと、お嬢ちゃん」

「優迅」

「え？」

「私の名前は優迅。パパが名付けたんですよ」

「ば、ばは……」

言葉の理解に数秒。それが自身のことだとわかると、彼の顔は一瞬で真っ赤に染まった。

「いや、俺はまだ21で、先月日本に帰ってきたばかりで」

「そんなことどうでもいいの」

そう、彼女にとって鈴木的事情など知ったことではないのだ。彼女は未来からの来訪者であり、鈴木聡太の娘だということが、彼女にとっては一番重要な事柄なのだ。

「……せつかく来たのに、ひどい」

未来から来たということも、ましてや自身の娘だということも理解してもらえないことに、さすがの少女も悲しくなってきたようだ。その瞳はうつすらと熱を帯び、やがて――。

瞬間、鈴木は自らの危機を本能で察した。今この状況で、少女が泣き出せば彼は不審者であるというレッテルを、否が応でも張られてしまう。それは何としても避けなければいけないかった。

「わかった。君の事情はよくわかった。だから、そんな顔はやめてくれ。あ……と、俺も行く場所があるんだ。だからそろそろ」

「どこに行くの？」

先ほどまで潤んでいた瞳はどこに行つたのか、いつのまにか彼女の瞳は好奇心にあふれ、鈴木顔を覗き込んでいた。

「いや、幼稚園に、ちよつと用事が」

「私も行く」

「……」

鈴木の予想通りの反応を彼女は示した。彼も何も言うことはない。ただ大きなため息をひとつ零すと、くるりと少女に背を向けた。まるで、ついてこいとも言っているかのようだ。

少女は、口元に笑みを浮かべると、その不器用な背中の後を追っていく。やがて、手持ち無沙汰にだらりと落ちた腕に、少女はぴったりと体を密着させた。一瞬、気まずそうな表情をした鈴木だったが、彼はまた何も言わずにため息を零すのである。

「……本当に未来から来たんですか？」

「えー、娘に敬語で話すんですか？」

「君も敬語じゃないか」

「私は娘だからアリでしょ」

「そう言われたら、まあ。確かに」

鈴木は適当に会話を終わらせると、幼稚園へと進む足を速めた。既におかしな状況に陥っている。未来から来た。それが事実だとして、彼は今すぐにでもあの場所に、あの人に話を聞きに行きたかったのだ。現実にあつて、最も現実から離れた存在、金色の魔女の下へ。

「うわあ、大きい」

少女がこの建物を前にして最初に呟いた言葉だ。

「そうか？まあ幼稚園だからな」

住宅が密集している地域の幼稚園。そんなに広さを意識した覚えはなかったが、やはり初めて見る人には大きく映るのだろうか。しかし、彼女も幼稚園には通っていたはずである。この幼稚園も平均的な大きさだと思うのだが。

俺はちらりと横目で彼女の顔を盗み見た。よく見たら、その顔立ちは純粋な日本人のもではない。もし仮にも、万が一にも、この少女が俺の子供だとしたら、俺の結婚相手は——。いや、考えるのは止めよう。俺はもう一度、少女を見た。ピンク色を帯びた髪。やはりこれは染めているのだろうか。

ふと、彼女が振り返る。俺は慌てて目を逸らすと、急ぎ足で幼稚園へと向かった。後ろからは、ズルズルと重たい荷物を引き摺る音が聞こえる。

「その鞆、重くないか？」

「大丈夫。私が持っていきたくて詰め込んだの」

そういつて、彼女はへへつと笑った。

ああ、確かにこの雰囲気は——。

言葉の続きが浮かぶ前に、俺は勢いよく頭を振った。一瞬、俺の良く知る人物と彼女の顔が

重なりかけたのだ。

いやいや、そんなわけはないだろ。

俺は下らない冗談を忘れるように、そつと幼稚園の扉を開けた。

「ご飯だ!!」

開口一番、聞きなれた声が室内に響き渡った。

「ご飯、ご飯——っ!!」

そう言いながら、彼女は俺に抱き着いてきた。まるで俺の名前が「ご飯」だともいうように、何度も何度もその言葉を繰り返す。

「俺はご飯って名前じゃないですけど」

「そんなのわかってるよ、でも、どうせならこんな風に歓迎される方がいいでしょ？」

相変わらずだ。彼女は、リニア・イベリンは相変わらずこの調子である。以前と何も変わらない。変わったと言えば、俺たちの関係だ。恋人、というやつである。

「いつもよりちよつと遅かったね。なにになに？今晚の夕飯は何にしようか考えてくれたの？私はなんだって食べるけど、でも嬉しい」

「勝手に妄想を押し付けるな」

こんなふうに玄関で揉めていると、奥の方から先生と奏もやってきた。

「あら、いらつしゃい」

先生がにこりと笑いかけてくれる。対する奏は、何も言わずに俺の手元から鞆を取り上げた。

「それ、持ってあげる」

「お、おお。ありがとな」

未だに俺は奏の成長に頭が追い付いていないようである。小学生の時よりも、はるかに身長が伸び、雰囲気も随分と変わっている。

「ねー、それよりもお腹すいた」

「そんなこと言っても、飯が出来るには30分はかかるぞ」

すると、リニアは不機嫌そうに頬を膨らませる。そんな彼女を見かねたのか、

「そんなにお腹が空いたなら自分で作ればいいのに」

奏の冷たい声が響いた。

「ご、ごめんなさい」

さすがのリニアも頭を下げる。その光景を先生は楽しそうに笑っていた。

「今日もいいもの見させてもらったわ。良かったわね、鈴木くん。こんな可愛い子たちに囲まれて。羨ましい、羨ましい」

「それ、皮肉に聞こえるけど」

「あら、そう？それなら謝るわ。ごめんなさい」

そう言っつて先生はひらりと手を振って奥に行く。もう幼稚園の仕事は終わったのだろうか。

「あ、先生」

「ん？まだ何か言い足りないの？」

俺はほんの少し躊躇したものの、すぐに覚悟を決めて玄関の扉を再び開けた。入り口から離れたところで、少女は小さくなっていた。

「何でそんな隅っこに……ほら、おいで」

「いや、私は……その」

俺が手招きをするが、彼女は中々前に踏み出そうとしない。

「何だよ、さつきはあんなにベタベタしてきたのに」

「それはパパだから……」

瞬間、小気味のいい音が響いたと同時に、俺の頬が熱を帯びた。というよりは、痛みが出てきた。

「パパ……!!」

「鈴木聡太さん、これはどういうことでしょうか」

リニアが冷たい笑みを浮かべていた。それと同時に、彼女の手元も微妙に赤くなっている。

これはどうやら俺の命もやばそうだ。

「ん？」

ふと、横腹に刺激を感じた。何かがずっと突いている。

「か、奏……？」

「説明して」

奏は真顔でずっと俺の横腹を突いていた。危険だ。これは本当に、生命の危機が迫っている。俺はすかさず少女の元に行き、弁解の言葉を考えたが、どうやって伝えればいいのだろうか。わからない。

「先生っ、どうにかしてくれ」

「あははっ、いや私にも何が何だか。いつのまにあんな子供掬えたの？教えてくれればよかったのに、水臭いな」

それは火に油だ、馬鹿野郎。

「先生!!それは誤解だ、いや、リニア、なんだその顔。本当だって。ちよつ、奏。痛いから……!!痛いから……!!」

☆——「助けてください」

「……というわけです」

鈴木は傷だらけの顔を下げ、正座をしたまま弱々しげな声を漏らした。

「突然未来から来た、自分の娘……ねえ？」

リニアはもちろん、天城も奏も驚きを隠すことなく、少女の姿を見つめていた。

「はははつ、そんな未来って。そんなバカな」

「本当よ!!証拠だってあるんだから!!」

リニアが茶化すや否や、少女は勢いよく声を上げて反論する。そしてすかさず鞆の中へと手

を突っ込んだ。

「証拠ってお前、さつきはそんなこと一言も……」

「そりゃあ、パパなら当然信じてくれると思ったから」

「当然って……」

「えつと、あつた。これよ、これ」

そういつて彼女が取り出したのは一通の封筒だった。鈴木はリニアと奏を振り返り、最後に天城に目を向けた。誰も何も言わない。ただ彼らの視線は少女の手元の封筒に注がれている。鈴木は彼女からそれを受け取ると、ごくりと唾を飲み込み、意を決して封を開けた。

『久しぶりだな、鈴木』

鈴木の内脳に彼の声が再生される。数年ぶりに聞こえたその声は決して現実のものではない。しかし、彼の頭は正直なのか、何の抵抗もなく懐かしいという思いに駆られていた。



「何だよ、これ」

手紙の内容は至ってシンプルだった。差出人はどうかやら未来の時宮葵であり、少女が鈴木に会いたいというのでこちらに送ったということ。鈴木は深いため息を零すと、何も言わずに天城へと手紙を渡した。彼女はふんふんと何度か相槌を打ち、なるほどという言葉と共に顔を上げた。

「これは本人が書いたものね」

「え？」

リニアは驚きの声を上げ、奏も目を丸くする。鈴木は何となくそれを理解していたのか、大して表情を崩すことはなかった。この筆跡は時宮葵のものであり、未来から来たものだと言城は断定した。

ふと、鈴木は封筒の中にまだ何か入っていることに気が付いた。そして彼はその紙を見た途端、ふらりとよるめき、壁に頭を打ち付けた。そんな彼の手元から、リニアが紙を抜き取る。

「えっと、なになに……DNA鑑定書？」

「は、ははは、はは……」

抜け殻のような顔で乾いた笑いを零す鈴木。一方のリニアは、好奇心に目を輝かせて少女を覗き込んでいた。奏も、自身と同じくらいの相手だからこそ、より興味深いのだろう。じつと少女の姿を眺めていた。

「ところでお嬢ちゃん、何歳なのかな」

後ろで笑いを堪えていた天城が少女へと問いかけた。すると、彼女はびくりと肩を震わせて、鈴木の前へと駆け寄る。今の状態の彼では何一つ守ることはできないだろうに。

「そんな怖がらなくても大丈夫よ。何もしないから」

天城は優しげな笑みを浮かべて、少女へとゆっくり近づく。しかし、なおも彼女は恐怖の色を浮かべたまま天城を見上げていた。そして――、

「未来でママが、幼稚園の魔女は怖い人って言ってた」

「……………へえ？」

刹那、魔女の笑顔が引き攣った。

「うん、たぶんそれは人違いよ。帰ったらもう一度聞いてごらん。幼稚園の魔女は本当に怖いのか」

「先生は良い人だよ」

奏がすかさずフォローを入れる。

「うんうん、先生は本当にいい魔女だ」

リニアも激しく首を上下させる。

やがて、少女はほんの少しだけ警戒心を解き、ゆつくりと口を開き始めた。

「……………15歳」

「あら、奏ちゃんと同い年ね」

天城とリニアは互いに顔を見合わせる。対する、奏は少女の元へ近づき、彼女の手を両手で

ぎゅつと握りしめた。

「お友達……」

「……うん」

照れ臭そうに笑う少女。ひとまず彼女の素性がわかり、この場は一件落着となったはずであった。だが、彼らの間ではまだひとつとても重大な疑問が残されていた。口火を切ったのはやはり、この女。現状、全ての出来事を笑い飛ばせる唯一の人物、天城紫乃である。

「ところで、あなたのお母さんは誰なの？」

パリンツと一瞬、空気が凍る音がした。リニアと奏は、どちらからともなく視線を交わす。そして鈴木の人であるという事実を盾に、優勢であるリニアが彼の腕にピタリとくっついた。

「そりゃ、当然私でしょ。結婚する予定なんだし」

すると、少女は訝しげな表情でリニアを見た。

「……ママはこんな軽薄な人じゃない」

「え」

再び室内は沈黙に満たされる。当の本人であるリニアは、何を言われたのかわからないといった顔で瞬きを繰り返していた。

「え、いやいやいやいや、聡太、え、私じゃないの？」

「いや、俺に言われても……」

鈴木は迫りくるリニアから逃れるように、顔をのけぞらせた。一方、奏はどこか安心したような表情で少女を抱きしめた。そして、リニアに向けて勝利のVサインを向ける。

「ママは……日本人じゃない」

少女の一言に一瞬、顔を強張らせた奏だったが、その言葉を訂正するかのように先ほど以上に熱い抱擁を施した。

「い、痛い!!」

少女の叫びと、奏の静かな怒り。その後ろでは鈴木が今もリニアに問い詰められている。天城はそんな光景を見て、ひとり再び口元を緩めるのであった。

☆——四面楚歌

先ほどから重苦しい空気が、俺の体を押しつぶすかのように漂っている。

「それで君は何のために未来から？」

ひとまず誰が母親かという問題は考えず、少女がここまで来た理由は何なのか。俺は話題を変えるかのように質問をした。

「それは……」

「それは？」

少女は非常に気まずそうな表情で、自身の指を弄びながら答えた。

「……ママとパパ、離婚しちゃったから」

「え」

驚きの声は3つ。俺と、リニアと奏だ。リニアに至っては、私のせいかなどと下らない冗

談さえも眩いている。

「じゃあ俺はバツ1なのか？」

「私が1歳になる前にはもう離婚してたらしい。ママはパパのこと大好きだったけど、別れなければいけない理由があつたみたいで。でも、ママは今でもパパのこと愛してるって言つてた。それと私……私、パパの顔、一度も見たことなく」

衝撃が俺の脳内に打ち付けた。いや、衝撃なんて瞬間的なものではない。罪悪感というものが、じわじわと体中に広がっていくのがわかった。俺は、未来の俺は自分の子供に、こんな悲しい思いを平然とやってのけているかと思うと、腹立たしくもなってきた。

「隣に住んでる葵おじさんが、自分は人を好きな時間に送ることができるといふから。お願いして……」

「葵おじさん、か。あいつ、そんなところにいるのか」

思わず笑いだしてしまいそうになるのを我慢し、俺はそつと少女の、優迅の頭を撫でた。

「そういえば、ママには許可をもらって来たの？」

リニアが尋ねる。たしかに言われてみれば、そうである。いくら父親に会いたいからといっ

て、15歳という少女をひとりで過去に送るなんて、正気の沙汰とは思えない。

「ママはとても厳しい人だから。きつと絶対に許してくれない」

「家出？」

「家出だね」

優迅の言い分に、リニアと奏は揃って相槌を打つ。先生は先ほどからずっと笑い続けていた。「けど、父親の顔を見たかったっていっても、家の中に写真の一つや二つ位あるんじゃないのか？」

「ううん、ママがパパの写真全部燃やしたって言ってた」

「……未来の俺は一体何をやらかしたんだ」

奥さんが俺の写真を燃やしている図。そんなもの、想像しただけでも寒気がする。ふと、リニアが笑顔で俺の肩に手を置いた。

「だから、私とは別れちゃだめだよ？」

これはどういう意味なのか。自分ならやりそうな行為だと思つての発言なのだろうか。いずれにしても、さらに肝が冷えた。

「それはそうと、ご飯はいいのかよ。いつまでも玄関で立ち話してもしようがないだろ」とすると、思い出したかのようにリニアが跳ねだす。全く単純な奴だ。

「君も、お腹空いてるか？」

「ご飯？」

優迅は、不思議そうに首を傾げた。

「ご飯。もう食べたのか？」

「食べてない。何も食べてない」

「じゃあ、作つてやる。そうだ、寢床も何とかしないと。俺の家に来るか？」

「だめ!!」

俺の提案を、即座にリニアが却下した。

「だめだよ、聡太の家はだめ。反対。絶対反対」

「私も右に同じく」

奏もリニアと揃って異論を唱える。

「ここだと部屋もいっぱい余ってるんだから!!ここに泊まりなさい!!」

「私もその方がいいと思う」

確かに彼女たちの意見は正論だ。いくら娘だとしても、独り身の男の家よりはこっちの方が女同志、気が楽かもしれない。

俺はどうするべきか、ちらりと優迅の反応を伺った。そして――、

「いや、やっぱり俺が面倒を見る。俺を見に来たようなものらしいからな」

すると、今度はリニアも奏も口を閉ざした。反論することはできない、しかし抗議はし続けるといった目をしている。じつと、俺たちの視線が交錯する中、緊張の糸を解いたのは先生だった。

「ほらほら、とりあえずご飯食べましょ」

そういつて先生は奥の部屋へと消えていった。俺も、キッチンに向かうことにする。きつとこのまま何も無い、いつもの日常に戻ることはないだろうと。これから先の波乱に俺の体は、ほんの少し元気をなくしていた。

☆——父と娘

幼稚園で食事を済まし、俺と優迅は二人で帰路についた。幼稚園を出る際、複雑な表情でリニアと奏が手を振っていたのは、忘れることにしよう。

幼稚園を出て数分後、簡素なアパートの前にたどり着いた。玄関の前に着き、俺はポケットの中から、レシートと小銭の間にある金属の塊を取り出した。そして、その人工的な音を静かに聞き届けると、俺たちは部屋の中へ入った。

玄関を入つてすぐ、俺は慣れた手つきで照明のスイッチを入れた。

「わあ……意外と綺麗」

「意外とって何だ」

娘の初感想にどことなく不満を覚えたが、彼女は俺の反応をいちいち気にしていないようである。しかし、部屋の奥に行くと、優迅はまたしても納得いかないといったように眉間にしわを寄せた。

「なんか、思ってたのと違うっていうか。男の一人暮らしだからもつと汚いと思ってたし、それに対して私が何か小言言いながら掃除しようと思ってたのに」

「それは残念だな。けど、汚いよりは綺麗な部屋の方がいいだろ」

「そうだけど。私も掃除得意だから、やってあげようと思ってたの」

そういつて彼女はテーブルの前に腰を下ろす。俺はキッチンで二人分の飲み物を手にすると、何の迷いもなく優迅の向かいに座った。

ワンルーム、テーブルを挟んで向かい合う少女と男。特に会話をすることもなく、俺たちは静かにお茶を口にしていった。何か話題はないかと探り探り、彼女の様子を伺っていると、優迅はどこか落ち着かないのか、部屋のあちこちをきよるきよると見回していた。

「男の一人暮らしだからな、面白いものなんかないぞ」

「うん」

「……男の部屋に入るのは初めてか」

「え？え、あ、あははは」

俺の問いかけに、優迅は照れくさそうに笑った。不意打ちの対応、今の様子は確かに俺の娘だと言われても否定しきれない。

しばらく彼女は物珍しそうに室内を見ていた。立ち上がって色々と探されるよりはマシだが、じつと座ったまま見られるのも恥ずかしい。まるで査定でもされてる気分だ。

「え……と、そうだ、お風呂。疲れただろ、シャワー先に浴びてきていいぞ」

「お風呂に入る」

優迅は嬉しそうな顔で手を叩いた。そして、すぐに自身の鞆を引き寄せて着替えの服を取り出す。上着に、下着に。俺は最低限の配慮のため、部屋の隅にいき、彼女に背を向けて座りなおした。

「風呂とトイレは一緒の所にあるから、自由に使ってくれ」

「え、一緒に入らないの？」

「え」

静寂。俺は思わず振り返ってしまった。女の子らしい下着と着替えを手に、彼女は寂しげな表情で俺の顔を見ている。当たり前のように、一緒に入ると思っていたらしい。

「い、いやいや、君は15歳だろ!?俺は21!!どう考えても犯罪の匂いしかないだろ!!」

「でも、ママとは一緒に入ったんでしょ？」

「そ、それは……」

俺にはまだそんな経験はないが、未来の俺ならやり遂げているのかも……いや、そんなことは今は重要ではない。15歳の少女と一緒に風呂に入る勇氣など、俺にはないのだ。何とかして一人で入ってもらわなければいけない。

「15歳なら、一人で風呂くらい入れて当然だろ。それにこの家の風呂は2人だと狭いから!!」

そういって、俺は無理やり優迅の背中を押して、風呂場の方へと追いやった。相変わらず残念そうな顔をしているが、こればかりはどうしようもないのだ。

「……わかった、一人で入る」

娘の一言に、俺はふーつと長いため息をついた。しかし、俺は重要なことを失念していたのだ。この部屋はワンルーム。風呂はトイレと併設。つまり、脱衣所という場所がないのだ。俺がそのことに気づくと同時に、彼女は上着に両手をかけていた。

「ストロップ!! だめだ、だめ!! ちよつ、何考えてんだ、お前!! 女の子が!! 何考えてんだ!!」

ちらりと肌が見えた気がしたが気のせいだろう。俺は間一髪のところ、彼女の手元を止めることに成功した。冷や汗の吹き出す顔で止めに入った俺を、優迅は不思議そうな瞳で見つめている。

「え、親子なんだから、そんな気にしなくてもいいでしょ」

「いや、そうだけどそうじゃない。いや、違うんだ。これは俺の倫理観というか、今後の俺の精神状態に関わってくる案件であって……」

俺の長々とした説明に飽きたのか、いつのまにか浴室からシャワーの音が聞こえていた。

俺も大概面倒くさい父親になりそうな気がする。

風呂場からの軽快なメロディを聞きながら、俺はバリケード制作に勤しんでいた。バリケードといっても、天井からカーテンを垂らし、簡易的な更衣室にただけだが。海外で学んだ知識の一つである。布切れ一枚でこんなにも罪悪感が軽くなるとは思わなかった。しかし、この調子で彼女と一緒に暮らせば、3日ほどで俺の心と体は蝕まれてしまうだろう。

そんなことを考えていると、俺の背後で浴室兼トイレの扉が開く音がした。再び体中の神経に緊張が走る。何が起こるか分からない。いや、何を仕出かすかわからない。

「お風呂ありがとうございます」

「あ、ああ」

「あ、カーテンがついてる!!」

髪や体を拭きながら、彼女は嬉しそうに声を上げる。俺はというと、もちろん窓の外を向き、無罪を証明するかのよう、瞼をきつく閉じていた。

「パパ」

「……なんだ？」

「覗いちゃだめですよ」

「覗かないわ!!」

無心になって俺は目を閉じていた。背後で聞こえる、衣擦れの音など俺の耳には何も聞こえないのだ。

「見て見て、パジャマ!!」

その声を聞き、俺は彼女が着替えを終えたのだとわかった。俺は一気に脱力し、そのまま首だけを後ろにのけ反らせた。

「着替えの服はちゃんと持ってきたんだな」

「うん、それなりの準備はしてきたから」

見せつけるようにくるくと回転する優迅。俺は仰いだ首の流れに逆らうことなく、そのまま床へと背中を預けた。横になると、すーっと体から気が抜けていくように心地が良い。

「パパ？何してるの？」

目を開けると、優迅が不思議そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「今日は色々あったからな。俺は疲れてしまったよ、優迅さん」

「お疲れさまです」

視界の真ん中で、彼女が楽しそうな笑みを見せる。

「お風呂でゆっくりできたか？」

「うん!!自分の家以外のお風呂入ったことなかったから、不思議な感じだった」

そういつて、優迅は俺の体の上に倒れこむ。腹部にのしかかる妙な暖かさに、俺の心も溶かされていくようだった。

「……当分の間は、ここが君の家だから。遠慮しないで、好きに過ごしていいからな」

すると、優迅がぱつと顔を上げた。そして――

「パパ、だーいすきつ!!」

再び俺の腹部に、重たい頭がのしかかった。

☆――「息子」

同時刻・幼稚園内。

机を挟んで、リニアと奏は重苦しい表情をしていた。

「ひどい……聡太、一度も私のこと部屋に招待してくれたことないのに」

「私も、行ったことない」

互いに机の上に視線を落としながら、彼らは無慈悲な現状について愚痴を零していた。そんな二人の様子を気にすることなく、天城はぼつりと一言。

「大丈夫かしらねえ？」

「何がですか、先生」

平然とした口ぶりに、思わずリニアが聞き返す。すると、天城は何てことないような声音で自身の疑問を口にした。

「いや、パパといつても鈴木くんもまだ21。娘さんはまだ15歳。ご飯作って、洗濯して、一緒に寝て。疲労困憊した彼が誤った道に行かなければいいけど……」

瞬間、リニアと奏の頭上にガンつと衝撃が響いた。

「い、いや、いくらなんでも聡太ともあろう人物が!!ね、奏!!」

自身の不安をかき消すかのように、リニアは慌てて奏の元に駆け寄り、その体をきつく抱きしめた。

「リニア、痛い。そして、私もそれには同意。聡太はそんな人じゃない」

「それもそうねー」

天城は二人をからかおうとしたただけだった。リニアと奏もその魂胆はわかりきっていたのだが、どうしても否定せざるを得ない精神状況だったのだろう。

「さてと。明日もあるんだし、そろそろ寝ましょう」

そういつて天城が大きく伸びをし、自身の部屋に戻ろうとした。その時だった。

——ボンッ!!

外から爆発音のようなものが聞こえた。すかさずリニアが走り出す。その後ろを遅れることなく、天城と奏が追った。先ほどの爆発音を聞く限り、発生源は幼稚園のほぼ目の前に違くない。

すぐに彼らはその場所にたどり着いた。白煙が漂い、視界が霞む中、リニアはじつと目を凝らす。周囲には何もなく、やはり煙の中心部に原因があるのだろう。

やがて、彼女はその白煙の中に小さな影を捉えた。

「どういふこと……?」

「……」

「へえ……」

驚き方は三者三葉。なんと、煙の中にいたのは一人の少年だった。

「ちくしょー、親父のやつ!! 過去に送る!?! ふざけんな!!」

3人はじつと、目の前で悪態をつく少年に視線を注いでいた。ふと、少年も自分が見られていることに気が付いたのである。そして、不思議な様子で辺りを見回し、違和感を感じ取った。

「は……? ここ、どこだ? え、いや、なんだよ、これ」

当惑した表情で周囲に目をやる。そして、目の前で自身を眺めている人に視線を移した。その中の一人に、見覚えのある顔があったのだろう。信じられないと口をパクパクさせながら、少年は彼女を指さした。

「奏姉さん……？何で、そんなに若くなつたんだ？」
少年の指が示したのは、今年14歳になつたばかりの少女——九条奏だつた。

「私？」

☆——お姉さんはアラサー——

「奏姉さんが若い……じゃあ、ここは本当に過去なのか？」

少年はじつと奏を見ていた。対する奏も、不思議な顔で少年を見返す。

「そんな、あの奏姉さんが……俺を小さい時から世話してくれていた奏姉さんが……結婚もできなくて、俺の面倒見てくれてた奏姉さんが……!!」

その一言に奏の表情が強張る。対する少年は、頭を抱えてうずくまっていた。



「あの三十路の奏姉さんが……うわっ!!」

ついに奏は無言で少年の背中に蹴りを入れた。そして冷たい瞳を宿したまま、彼女は少年を見下ろす。

「私が九条奏だけだ」

「お、俺の知ってる奏姉さんはもうすぐ30歳のおばさ……ん!!」

今度は頭にチョップを入れる奏。そして、間髪入れずに問いかけた。

「どこから来たの？」

「……どこ」

少年は未だに自身の中で頭の整理がついていないようだった。視線を左右に躍らせながら、彼は確かめるかのように口を開く。

「俺は、俺は……俺が来たのは」

「未来からでしょ」

少年の狼狽した姿に見かねたのか、リニアが後ろから顔を出した。少年は突然現れた人物に、反抗するかのように口を尖らせた。

「あんた誰だよ、おばさん」

「お、おばっ……!!」

「おばさんだろ。ていうか、俺、本当に未来から来たのか？いや、でも、この人は奏姉さんと同じ顔してるし、ちくしょう。わけわかんねー」

そういつて彼は、服に着いた砂埃をはたきながら立ち上がった。

「ねえ、おばさん、今は西暦何年ですか？」

「このガキ……」

リニアの手が拳に変わる寸前、奏が前に出た。

「おばさんは失礼。未来の私はそんな言葉教えたの」

「そんなわけない!!」

「謝りなさい」

少年はおそらく奏に弱いのだろう。見た目では、そう変わらない年頃の二人だが、すぐに彼は彼女の言う通り、リニアに向かって頭を下げた。

「…………ごめんなさい」

「え、あー…………大丈夫よ、まあそんな時もあるさ」

リニアも混乱の真っ只中なのだ。彼女は誤魔化すように笑みを浮かべ、再び目の前の少年を見つめた。奏を姉と呼ぶ謎の少年。一体、彼は何者なのだろうか。

「ところで君は、誰の子供なのかしら」

またしてもこの場において、何一つ傷を負わないであろう女、天城が少年に問いかけた。再び奏とリニアに緊張が走る。

「あのおばさん…………痛っ!!」

「礼儀正しく」

「大丈夫よ、奏ちゃん。今のは何も聞かなかったことにするから」

天城は笑顔で少年を威圧した。次はない、と無言で語っている。

「君は、さつき過去とか言ってたわよね？ということは、君は未来から来たってことかしら」少年は何も言わずに頷く。そして、先ほどの誰の息子かについての答えを口にした。いや、既に前例がある時点で薄々彼らは感じていたのだが。

「俺の父親の名前は、鈴木聡太だ」

瞬間、どつと笑いが起きる。天城はもちろん、リニアまでもお腹を抱えて笑っていた。唯一、奏だけは何か考え込むような仕草をしている。

「な、なんだよ!!何がおかしいんだ!!」

突然笑い出した二人を見て、少年は何が起きたのかわからずにいる。しばらくして、彼らの笑いが収まった頃、すつとりニアが近づき、少年の肩をがしりと掴んだ。

「な、なんだよ……」

「お」

「お……?」

「お、お、お、おかつ、お母さんの名前はなんていうの?」

鬼気迫るリニアの瞳に、少年はほんの少し怯えた様子だったが、彼は質問に答えるようにゆっくりと首を左右に振った。

「わ、わからない。両親は離婚したから」

「いや、それはさっき聞いたんだ。何か、何か他の情報を」

「他って……そんな、わからない」

少年は姉と慕う奏に救助信号を送るが、彼女の瞳もリニアと同じ熱を持っていた。早く答えると急かしているようである。

「か、母さんは日本人じゃない」

その言葉に奏は落胆した。先ほどから姉さんと呼ぶあたり、彼女も感づいていたのだがやはり直に真実を口にされると、さすがの彼女も落ち込まずにはいられない。一方のリニアは、

一歩前進したとばかりに歓喜の声をあげた。

「それでそれで、お母さんの名前は？」

「い、痛いっ、離せよ!!」

興奮して肩を揺さぶってくるリニアから逃れると、少年は警戒したような目で彼女に問いかけた。

「おばさ……、そちらのお名前は何ですか？」

「私？私は、リニア。リニア・イベリンよ」

「リニア……イベリン」

少年は彼女の名前を繰り返した。そして、すつと目を閉じる。

「違う。母さんじゃない。母さんはそんな名前じゃなかった」

「はあ!？」

思わず少年に掴みかかろうとするリニア。その首根っこを天城は抑えた。

「それで、君はどうして過去に来たの？」

「別に来たくて来たわけじゃ……姉さん、俺の本当の姉さんが一人で過去に行つたつて聞いて、追いかけてというか」

「やはり家出か」

天城が相槌を打つ。すると少年は、面倒くさそうに両手を頭の後ろで組み、ぶつぶつと文句を言い始めた。

「勝手に過去に行つて、家の人に迷惑かけて。おまけに守れだ!? 馬鹿じゃねえの。まあ、俺の家じゃないから別に関係ないけど」

「それ、どういう意味？」

奏が不思議に思つて尋ねる。相変わらず彼女には弱いのだろう、少年は促されるままに事情を説明し始めた。

「そのままの意味だよ。両親が離婚した後、姉さんと母さんはドイツに行つて、俺は父さんと二人で暮らしているんだ。俺が物心ついたころには母さんもいなかったから顔もわからない。一度写真で見かけたくらいだ」

「大変だったのね」

思わずリニアが感想を口にする。しかし、少年は悲しむ素振りを見せることは一切なかった。

「別に。あんな姉さん……お姉ちゃんを守ってあげなさいって昔から言い聞かされて、指導とか受けてきたけど、何で俺が守らないといけないんだ」

「指導？」

またしても奏の問いかけだ。しぶしぶ、少年はそれにこたえる。

「魔法だよ。14歳の子供に、勉強よりも人を倒す方法を習わせたんだ。おかげで俺の性格が歪むのも仕方ない」

「何か事情があつてのこと。父親を悪く言わないの」

奏がそつと少年の頭に手を乗せて宥めた。すると、彼は一瞬驚いたような表情を見せたが、

「……未来の奏姉さんもそんな風に言って宥めてくれてた。俺だって、わかってるよ。父さんは俺のために仕事にも行ってくれてるし。おかげで、いつも家の中は奏姉さんと俺のふたりきりだったけど」

「え」

思わずリニアが驚きの声を漏らす。奏もつい目を丸くしてしまった。

「奏姉さんが、俺を小さいころから面倒見ててくれて、幼稚園の送り迎えとか、授業参観とか、全部一緒に行った」

「それはつまり、実質母親なのでは」

ずいっと奏が前に出る。普段よりも幾らか興奮した声音だ。

「ま、まあ。父さんより奏姉さんと一緒にいる時間の方が長いけど」

「そういえば、君の名前は？」

「名前？」

突然、脈絡もなく奏が少年の名前を尋ねた。奇妙に思いながらも、彼はおずおずと自身の名を口にする。

「ゆ、優歩だけど」

「優歩……ママって言うてみて」

「え、え、え、奏姉さん？」

「ママ……って」

「い、いや、そんな」

奏の顔が無言で近づいてくる。少年が、ひつと声を上げて後ずさった。そんな彼らの間に、今まで放置されていたリニアが割って入ってきた。

「ちよつと、ちよつと、私は!? 奏がママやってる時、一体私は何をしていたっていうの!!」

優歩は奏の視線から逃れるように、リニアの方へ顔を向けた。

「……知らないよ、俺、あなたみたいなの知らない」

項垂れるリニア。そんな彼女を奏は勝ち誇ったような顔で見っていた。当の本人である少年にとって、二人の喧嘩は全くわからない。彼は訝しげな視線が絡み合う彼らの間を抜け、天城の元へと駆け寄った。

「何なんだ、一体……俺は姉さんを探しに」

「あなたのお姉さんはお父さんと一緒にお家に帰ったから、そこに行けば会えると思うわ。あの子たちと一緒に行ったら？」

天城は楽しげに笑いながらリニアと奏を指さす。先ほどから傍観を決め込んでいる彼女、少年は探るような視線で天城と彼らを交互に見た。

「……本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫、大丈夫」

けらけらと笑い、天城は楽しかったと言葉を残して幼稚園の中へと入っていく。

「じゃあ、私はまだやること残ってるから」

そう言つて、手を振る天城。その瞬間――

重くのしかかるように、嫌な空気が辺りに満ちた。そしてどこからか黒い霧が立ち上ってきたかと思うと、すぐにそれは霧散し、

「何かおかしい!!」

リニアの声が終わるや否や、大きな火柱が彼らの目の前で立ち上った。距離からして数メー

トル先。ここから歩いて数分もない距離であり、そこは――、

「あそこつて……聡太の家だよね？」

「そんな……父さんの？」

奏も驚いた顔で頷く。彼らがそこに立ち止まっている時間はなかった。すぐにリニアは、少年の腕を掴んで走り出していた。火の手は、勢いを増していくばかりだ。

「驚いている時間はないわ、きつと襲撃に違いない。考えなくても、未来から誰かが来たなんていう、時空の歪に、両方の機関がじつとしているわけがなかった」

奏は走り出したりニアの背中を見て、何も言わずにこの状況を眺めている天城に振り返った。

「行つてきます」

「……行つてらっしゃい」

ひとり、幼稚園の入り口に残された天城は、遠くにのびた真っ赤な炎を見つめる。

「このタイミングで協会と研究所。相当、退屈をしていたみたいだな」

そう言つて天城は、3人に背を向けて幼稚園の中へと入つていった。

「そういえば、あの少年。私が何者か知らないみたいだったけど。ま、いつか」

「行つてしまつたわね」

深い黒髪を宿した一人の女性が窓の外を見て呟いた。外は暗闇、映るのは自身の顔だというのに、彼女は娘の事を考えているようだ。心配というよりは、どこか興奮しているような口元。彼女の瞳は娘の旅路に何が起こるのかを想像し、期待に満ち溢れていた。

「すべて、私たちの計画通りであることも知らないまま」

そう呟くと、女性は椅子から立ち上がった。そして別の部屋へと移動する。

「家の中で喧嘩するのは避けてほしかったんだけど、仕方ないわね」

階段を降り、ある扉の前で彼女は立ち止まると、小気味のいい音を立てて扉を開けた。室内には青年が一人。彼女に比べてとても若い風貌をしている。

「そろそろかな」

青年は女性に声をかける。女性はそつと瞼を閉じて聴覚に神経をとがらせた。遠くで、何人もの足音が聞こえた。それは徐々に彼らの元に近づいてくる。

「来る」

青年の合図とともに、勢いよく扉が開かれた。灰色の服を纏った男たちがどつと室内になだれ込む。対する、青年は笑顔で彼らを迎え入れた。

「片方だけか、研究所の方は寝坊か？」

返答はなかった。互いが互いの動きに注視する中、彼らの内のひとりが威圧的な口調で口を開いた。

「鈴木優迅はどこにいる」

「さあ。それよりも早く終わらせましょ。おかげで14年もの間、私は旦那と会えていないんだから」

そうやって、女性は一步前に出た。一方、彼らは物陰に少女が隠れていないか周囲を見回す。やがて、先頭の男が彼女の隣にいる人物の顔を見て、驚きの声を上げた。

「なんで、お前は、まさか……」

青年は男の問いに答えない。まるで彼の言葉の続きを待っているかのようにだった。

「お前は……十数年前に行方不明になったはずだ、時宮葵!!」

男の上げる声に、周囲の顔色も一瞬にして変わった。

「時宮葵……『タイムダイバー』。娘を他の時間軸に送ったな。」

「さあ、どうだか」

青年の反応は彼らの怒りを買ったようだ。手前の男が腕を上げると、まるで陣形を組むように数人の男たちが彼らの周りを囲った。

「そうそう、これなら話が早いわ」

女性が一步前に入る。そして、彼女は後ろを振り返ることなく青年に声をかけた。

「ここは任せて。それよりあの子の方に行って」

青年は頷き、次の瞬間にはその場から彼の姿は消えていた。

やがて、安心して暴れられるとわかった彼女は、身体をほぐすように軽くステップをすると、戦闘態勢に入った。

「ここには、私とあなたたちだけ。久しぶりに思う存分発散できるわ」

そうやって女性は、自身の髪の毛にそっと手を置いた。ふわりと魔術的な風を起こすと、彼女の髪色が根元から変わっていった。真っ黒な黒髪から、きらきらと光りを反射するように綺麗な銀髪が顔を出す。

その様子を見て、彼らも冷や汗を流した。なぜなら、彼らの目の前にいる女性はただの女ではない。

「銀髪の魔術師……協会に反抗するつもりか!!」

「ええ、そうよ。協会との関係なんて知ったこっちゃない。あんたたち、私がどんな思いこの14年を過ごしてきたかわかるか!?!」

彼女は元の髪色に戻したせいも、性格も先ほどと違い攻撃的になっていた。そして奇妙な笑

みを浮かべて、女性は彼らに向けて言い放った。

「全員死刑よ」

PYTHONESS

第二話



かなで
九条 奏

生年月日
血液型
出身地
特術
好物

11月1日(14歳)

AB型

千葉県

料理50人分を一人で作ったことがある。
カラオケはいつも一人で行く。

大事な人が外国から買ってきたネックレス

The Sole Survivor

九条奏

くじょうかなで

★——マルセン

マルセンはかつて、一度死んだ身である。しかし、運よく彼は生き残った。10代の少女の姿という副作用と共に。

『マルセンは男だ。それも40を超える中年男性だ』

彼は「ゴショックで死の危機にさらされていたが、自身の研究を元にある移植手術を行った。のちに「ノエル」と名付けられる量産型の人造個体のひとつに脳を移植するという手術だ。記憶、人格が刻まれた脳は別個体にはめ込まれても以前の自身と何ら変わりはない。マルセンはそう判断したのである。そして、手術は無事に成功した。彼は『ノエル』という少女の人造個体に再びその生命を宿したので。

しかし、そこには問題があった。元々ノエルという個体に宿っていた人格が存在した。それは新たに侵入してきた彼の人格を否定するかのよう^にに侵食を始めたのだ。マルセンはかろうじて人格の侵食は防いだものの、言語回路に致命的な欠陥を負ってしまうという結果になった。

唯一、少女の体で得たものといえれば後天的なのその能力である。原因は不明だが、彼は偶然とも言うべきか、e.t.c.を覚醒させたのだ。自身には関わりのないものだと思っていたばかりに、マルセンは当初困惑していた。彼が発現させたe.t.c.は、他者のe.t.c.を感知するという非常に有効的な能力だった。「探知」と名付けられたそれは、地図上の半径0.5 kmの範囲にe.t.c.が使用されているかが、遠くの地においても把握することができ、主に彼は拠点である場所をいくつか設けていた。

特に注視しているのは、第三勢力である、金色の魔女の家である。

現在マルセンは研究所に幽閉されている。しかし、これは数時間前に起きたことである。

彼はいつものように暗い室内で、何をするということなく、探知のe.t.c.を使い、魔女の家に動きがないかを監視していた。特に変わりはない、いつものように探知を終えようと思っていた頃だ。

「これは……」

「マルセン、どうかしたか」

彼を呼んだのは、マルセンが2年前の戦いで救出した数少ない同志のひとり、ロベルトだ。特に行く当てもなく、研究所内での居心地も悪いので、現在、彼はマルセンの隣で助手のよ

うな役割を果たしていた。

「マルセンはいつも通り探知をしていた、すると、とても面白いものが現れたんだよ」

「……いつまで経っても、その口調には慣れないな」

「マルセンもそう思う」

言語回路の欠如はこの通りである。彼は自身を述べる時も、3人称でしか話すことができないのだ。

「それで、面白いものって？」

「魔女の家を探知したマルセンは、不思議なetcを感知した」

そう言っつて、彼は再び能力を使用し、感知した能力名をノートの端に書き連ねていく。

「不思議なつて。以前から知られてるやつじゃ……ない」

マルセンが記した最後の能力名に、思わずロベルトの口が止まった。

「……どうということだ」

「マルセンが知る限り、『物取り』の能力者は2年前に行方を眩ませた。言葉の通り、この世界から姿を消した。だが、他の人間が同じ能力を発現していないところから、”物取り”の能力は死んだわけではない。能力を保持したまま、別の世界に移動したという結論をマルセンは下した。そして、現在、『物取り』の能力が魔女の家で感知された。だが、おかしな点がある」

「おかしな点？」

「『物取り』の能力は微弱だが、2つある。まるで一人の人間が二つのものを持っているかのように」

案の定、ロベルトは口元を斜めに尖らせている。

「言っている意味が分からないな。2つの能力を持っている能力者がいるってことか？」

「わからない」

説明を終えると、マルセンは彼に向けて小さな鍵を投げた。

「そのキャビネットの3番目から本を取ってくれ」

「……これか？」

しぶしぶ立ち上がったロベルトは確認するように、マルセンに振り返る。ぼろぼろの装丁をしたそれは、古い研究の本のようだ。

「それはベルコルにもらった、etcの写本だ」

「何？」

ロベルトはその一言に体を強張らせた。だが、すぐにマルセンは落ち着きのある声で彼の想像を打ち砕いた。

「もちろん未完だ。数種類ほどのものしか記載されていない。覚醒方法や取得方法も載っていない、辞書代わりみたいなものだよ」

マルセンはしばらくその本に目を通すと、ぱたりと本を閉じて灰色のローブを脱いだ。ロベルトの前で少女の裸体を晒すが、彼も見慣れているのだろう。ロベルトは構うことなく、マルセンの着替えを見守っていた。そして、着替え終えた彼に声をかける。

「出かけるのか」

「ああ、マルセンは久しぶりにこの部屋を出る。飛行機を用意してもらいたいのだが」

「それならゴトーが何とかするだろう」

「君はどうする」

白と黒のスーツに身を包んだ少女が、ロベルトを見上げる。彼は何を今さらと零すと、椅子から立ち上がった。

「そんな小さい体一つじゃ何もできないでしょう」

「……いや、マルセンは一人でも大丈夫だ。まあ、君がついてくるのは自由だが」

「素直じゃないね」

そして彼らは揃って、小さなうす暗い部屋を後にし、2年ぶりに研究所の本部とも言うべき大きな扉の前に立った。周囲の人間は、大して彼らの外出を叱責することもなく、どちらかというとまるで彼らがいらないかのように2人を気に留めることはなかった。2年前の事件以降、急進派の権威は崩壊したといっても過言ではない。今更、彼らが動こうと関係ないといった空気がそこにはあった。

「辞書にはなんて書いてあったのさ」

階段をのぼりながらロベルトは尋ねた。マルセンは顎に手を当て、考え込むような仕草のままそれに答える。

「マルセンの推測は二つだ。この世界から消えた能力が再び現れたことから、その能力は別の世界に移動したと思われる。過去、おそらくは未来に。そして、2つ重なった能力、能力者自身に別の誰かの能力がかけられていると思われる」

「一人の人間が複数のOTCを持つことはできないからね」

階段を登り切ると、大きな門が待ち構えていた。2年前と変わらない施設に、彼らは躊躇うこともなくその扉を開ける。そこには飛行機が用意されていた。

「暑い、それに日差しも眩しい」

「そりゃ、夏ですから」

ロベルトも額に手を当てて、空を見上げた。

そして彼らは僅かな荷物を詰め込むと、飛行機に飛び乗った。

新たなOTC、それを用いてマルセンは、本当の自分の体に戻るつもりである。いや、戻れると信じて、彼らは再び日本へと向かった。

☆——ノエル探偵事務所

「マーガレット、おなかすいたー」

玄関の扉が開くと同時に、間の抜けた少女の声が響く室内。マーガレットと呼ばれた女性は、制服を脱ぎながら部屋に入ってきた少女を一瞥し、深いため息をついた。

「いつになったら、脱いだ服をハンガーにかけるということを学ぶのかしら」

「いいでしょ、あとでやるから」

すぐさま部屋着に着替え終えた少女。そんな彼女の前に立ち塞がるかのように、マーガレットは腰を落とした。

「良くないです。レディーとしての立ち振る舞いになっていない。それにあなたは、ノエル・スイート、自身の名前の重要性を考えなさい」

「ふんっ、スイートなんて名前、私が欲しくてもらったわけじゃない。成り行きってやつよ」
ノエルは両腕を振り回して、マーガレットへ反抗する。だが、すぐにその腕はだらりと床に向かつて降ろされた。

「……おなかすいた」

年相応の反応にマーガレットも諦めたのか、彼女はほどいたエプロンを巻きなおして再び台所へと向かった。そして慣れた手つきで調理を再開する。

2年ほど前までは協会本部のパリ支部で、アンダーソン・カイルの秘書として働いていた彼女。整った容姿にさっぱりとした性格は大人の雰囲気と纏わせ、職場内の男性からも誘いが絶えなかった。しかし、彼女は仕事一筋、働くことが何よりも大好きなキャリアウーマン。そんな折に起きたのが2年前の事件である。上司であるアンダーソンの謀反。協会は躊躇うことなく、彼の自室を爆破した。運よく、彼女は外出をしていたがこのままでは、自分がいつ殺されてもおかしくないとマーガレットは悟った。

事件後、彼女はアンダーソンや彼の知り合いの計らいにより、日本へと亡命してきたのだ。そして身を隠すために一番安全な場所と称されてやってきたこの家、そこには既にノエル・スイートという少女が住んでいた。マーガレット自身、弟がいるので彼女と過ごす生活はそれほど苦ではない。だが、何もトラブルがないわけでもないのだ。

「ねえ、パスタ食べたい、チーズいっぱいのパスタ!!」

「却下。それは昨日食べたでしょう。食事はバランスが重要なもの」

「ええー」

「今日は別のメニューを作るから。少々お待ちください、2代目」

納得いかないと頬を膨らますノエル。彼女は既に食卓に座っていた。そんな彼女をマーガレットは「2代目」と呼んで皮肉る。

2年前の事件でノエルは窮地にいた。協会が追っていた実験体をアンダーソンは謀反者と非難されながらも、彼女を守り切ったが、事件後もノエルという存在は協会において危険分子に違いなかった。

そんな彼女に手を差し伸べたのが、金色の魔女だ。ノエルを後継者としたことで、協会は容易に彼女に手を出すことができなくなったのだ。ノエル・スイートを攻撃するということは、金色の魔女も敵とみなすということである。更に、金色の魔女はアンダーソン・カイルとマーガレットを2代目金色の魔女の助手に任命すると決定した。これにより、彼らの手配命も取り下げられ、事件は無事にひと段落したわけである。

現在、ノエルは金色の魔女の2代目として、魔女が投げってきた雑務を引き受けることになっている。マーガレットが主に彼女の補助をし、アンダーソンが力仕事の依頼を引き受けるといった感じだ。

結局、2年前の事件で最大の利益を得たのは金色の魔女だった。彼女は2代目ができたことにより、大抵の雑務はノエルに回すことができる。更に、魔女の家からアンダーソンの家までの距離を勢力圏に入れることができたのだ。

「そういえば、学校生活はどうですか」

「別に。中学までは義務教育なんだから。レベルの低い奴らばかり」

退屈そうに素っ気なく答えるノエル。それでも、彼女の性格上、学校内でいじめを受けているというキャラでもない。マーガレットもその点においては自信があった。

「……私、キッチンで料理してるの見るの嫌い」

ふと、ノエルが呟いた。マーガレットは、その声に顔をあげる。気づくと、ノエルは彼女のことを凝視していた。視線が絡み合う。やや一呼吸おいて、マーガレットが口を開いた。

「そうなの？初耳」

「いや、別に何でも無い。余計な話だった、忘れて」

「今夜はリゾットよ」

「ふーん」

ノエルはどこかバツが悪そうに部屋の隅に目をやった。あからさまな態度に、マーガレットもつい口元を緩めてしまう。

「何か別に食べたいものでもあるのね、わかったわ、作ってあげるから手を洗ってきなさい」

「さつき洗った!!ていうか、別に食べたいものなんてない!!」

ノエルは顔を真っ赤にして、立ち上がった。そして扉の方へ向かう。

「どこいくの？」

「……もう一回、手洗ってくる」

「はいはい」

マーガレットもノエルの痛癢に慣れてきた頃だ。彼女は特に気に留めることなく、調理を続

ける。フライパンで肉を炒め、野菜を入れ、ご飯と卵を投入し、牛乳で煮込む。香ばしい香りについて彼女も鼻歌を刻んでしまう。その時だった。

ピーつと鳴り響く電話音。おそらく、ファックスが届いたのだろう。

「あら、仕事が」

このようにファックスが届くのは、金色の魔女か協会から以外はありえない。すぐに彼女は、コンロの火を止めると、床に落ちたファックスを拾い上げた。

「マルセン……移動？」

記載された番号を見て、すぐに彼女は協会からのものと推測した。

「ここの人たちは全く……人の事を殺そうとしておきながら、よくもこんな風に用事を押し付けてくるのね」

一通り、書類に目を通した後、ノエルの足音が聞こえてきたので、彼女はひとまず夕食にすることをにした。

☆——依頼

「マルセン、移動？どういうこと？」

夕食を食べ終えたノエルは、マーガレットから渡された書類を穴が開くほど見つめていた。

「わからない、協会と連絡を取ってみた方がいいかもしれないわ」

その言葉にノエルはすぐさま首を横に振った。

「必要ない。どうせ詳しいことなんか教えてくれない。だったらアンダーソンに聞いた方がいい」

「そうね、やはりそっちの方が」

その瞬間、ピーっと再び間の抜けた音が室内に響いた。2人は揃って電話機の方を見つめる。電話機の中からゆっくりと一枚の紙が吐き出されてきた。そして、それが床に落ちるとノエ

ルは真つ先に拾い上げた。

『未来からお尋ね者がきたよー♪ちよつと迷惑かけるかも？ 天城』

「未来からのお尋ね者？」

ノエルは眉間に皺を寄せて、この軽々しい文章を読み上げた。対する、マーガレットは様々な修羅場を潜り抜けてきたせいか、そこまで驚きを見せることはなかった。むしろ、どのようにして未来から来たのか、そちらの方に関心がある様子である。

一方のノエルは協会からの書類と、魔女からの書類を眺めて途方にくれていた。

「……わからない。やっぱりアンダーソンに聞こう。終わり」

こうしてこの話を終わらせようとしたところ、丁度いいタイミングで窓の外からエンジン音が聞こえてきた。アンダーソンが帰ってきたのだ。彼女は意気揚々と、玄関の方へ走り出した。

「ただいま、二人とも元気だったか」

「そんなのはどうでもいい、それよりこの紙を見て」

何かあったのかと尋ねる間もなく、彼はノエルが差し出す書類を手を取った。

「マルセン、移動。マルセンというのは研究所の人間だ。2年前の事件で唯一表に出てくることはなかった急進派の人間。わざわざここに連絡をよこしてきたということは、こいつがここ、日本にむかったということか……面倒になってきたな、何か事件が起きるって言うのか？」

アンダーソンは協会からのファックスを読み終わると、気難しい顔で額に手を当てた。そんな彼に追い打ちをかけるように、ノエルは魔女からのファックスを見せつけた。

「マエストロから？『未来から人が来た』……これは、時宮葵と関係があると思われるな。行方不明になっていたと聞いたが、こいつも何か仕出かそうとしているのか」

「え、じゃあ本当に未来から人が来てるの？」

「まあ、そういうことだろうな。じゃないと、マエストロもわざわざ悪戯でこんなファックスを送ってきたりはしないだろう」

「たしかに、悪戯をするならもつと手が込んでいそう」

彼の言葉に、ノエルは再び魔女からのファックスに目を通す。先ほどよりも僅かに頬が上気しているあたり、かなり好奇心が擽られているようである。そんなノエルを傍目に、アンダーソンは少し離れた位置に座っているマーガレットに声をかけた。

「マーガレットも、元気だったか？」

「ええ、おかげさまで、課長」

「……その課長っていうのはやめてもらえないか、今はもう、俺たちはここの探偵事務所の助手、立場は同じだ」

「あら、私はこの事務所の課長だと思ってますよ」

そういつて、マーガレットはにこりと微笑む。その笑顔に、彼は諦めた様子で話題を切り終えた。そして今度は、真剣な顔で彼女に問いかけた。

「君はどう思う？」

「同じタイミングでファックスが届いたので、何かしら関係があると思います」

「ふむ、やはり単純に考えると未来人が来たことにより、マルセンが動き出したと考える方が妥当か」

「つまり、われわれにマルセンの動きを止めると？」

「マエストロからのファックスをもつてしても同じだろう。要は、マルセンの動きを止め、且つ未来から来た人間を保護しろということじゃないか？」

マーガレットとアンダーソンは流れるように話を進めていく。ノエルはそんな二人の会話に追い付けず、椅子に座りながらじつと彼らの顔を交互に見つめていた。

「それでどうします？2代目」

「え？私？」

ふと、マーガレットが投げかけた声に、ノエルは目を丸くしてしまふ。すると、アンダーソンが説明し直すように、口を開いた。

「協会はマルセンの牽制を、マエストロは未来人の保護をいつている。俺たちはどう動くのか決めてくれって話だ。俺たちはノエル・スイートの部下だ、上司の言う通りに動く」

彼らはじつとノエルの瞳を見据えた。おそらく彼女がどんな道を選ぼうとも必ずついていくのだろう。

静かに、ノエルは瞼を閉じる。そして――

「あえて協会の指示に従う理由はない。ていうか、頼むならもつとわかりやすい文章にしるってことよ。だから、私たちは未来人を守る。以上」

ノエルが宣言し終わると、マーガレットは真つ先に立ち上がって奥の部屋へと引つ込んだ。そして、すぐに彼女は嬉しそうな笑顔と共に帰ってきた。その手には、フリフリのドレスが一枚。

「はいどうぞっ」

「いや、どうぞって」

ノエルは顔をしかめた。目の前に差し出されたドレス。明らかにサイズからしてマーガレット自身のものではない。



「なに、これ」

「可愛いでしょう。いえ、きっと可愛いですよ、私を信じて」

「いや、可愛いとかの問題じゃなくて」

「大丈夫です」

「大丈夫って何が」

ノエルが抵抗する間もなく、マーガレットは素早い動きで彼女の身ぐるみを剥がした。そして瞬く間にノエルの体は可愛らしいドレスに包まれる。アンダーソンはノエルへの同情に、着替え中はせめてものと視線を外していた。そう、マーガレットを止めることは彼にも適わないのだ。

「さあ、これで準備は万端ですね」

マーガレットの陽気な声と共に、3人は家を後にした。夜の静寂に、一台の車のエンジン音を響かせて。

☆——招かざる客

狭い室内に男女が二人。彼らはぐつすりと夢の中にいた。出会ってまだ数時間とはいえ、ぎこちなさはもちろん、男の容姿が若すぎるのもあり、この親子は一見してそうとは思えないだろう。

世界はこのまま夜の闇を超え、再び太陽が朝の光を携えてやってくるはずだった。

突然、鈴の音のように玄関のチャイムが鳴った。

男、鈴木聡太はこの音で目が覚めた。隣で寝ている自身の娘を起こさないように、そつと床から起き上がると、未だぼーっとした顔で彼は玄関の扉に手をかけた。

「誰ですか？」

覗き穴から何うと、その人物は鈴木が知らない外国人の男だった。

「こんにちは」

帰ってきた声は流暢な日本語。これは厄介な案件に違いないと確信した彼は、適当に会話を済ませて二度寝を決め込むことにした。

「はい、こんにちは。どなたですか？」

「開けてくれませんか？この状態じゃ、離し辛いです」

扉を開けるといふ謎の外国人に鈴木は躊躇いを覚えたが、このままでは帰ってくれそうもない。鈴木は仕方なくため息を零すと、用件を手短かに聞いて終わらせようと考えた。

そして、ガチャリと鍵を外す音を響かせ、扉からは僅かに室内の明かりが漏れ出た。

「用件は。あ、俺、宗教とか信じませんよ」

「はっはっは、大丈夫ですよ。私もモルモン教は信じません」

豪快に笑い声をあげる男性に、つい鈴木も愛想笑いを浮かべる。

「すみません、人を探してます」

「人？」

「この写真の少女なんです」

そういつて、男は懐から一枚の写真を取り出した。鈴木は、写真の顔を一瞥すると、再び男へと視線を戻した。男の顔には依然として笑顔が張り付いている。

「……知らないですね」

「そうですか、それは残念です。失礼しました」

そういうと、男は写真をしまい直した。そして、着崩れを直すと、礼儀正しく鈴木へ軽くお辞儀をしてその場を後にする。鈴木は、彼が立ち去るのを最後まで見届けて、ゆっくりと玄関の扉を閉めた。

「さっきの写真……」

先ほどの発言は真つ赤な嘘である。写真の中には鈴木にとって、とても見覚えのある少女の顔が映っていた。彼は室内に戻ると、そつと床に横たわる少女の横顔を眺め、

「あれは、きつと」

「んん……」

少女の気持ちよさそうな寝返りに思わず彼は口元を緩めた。

「お前は気楽だな」

今の出来事で、鈴木の目は完全に冴えていた。台所でコップに水を汲むと、ぐいつと一気に飲み干す。起きたての喉に、うるおいが満ちていくのを感じると同時に、頭もすっきりしていく感覚を彼は味わった。

「さてと、本当にこれからどうすればいいんだ。こいつを養っていくとして、問題だらけだな」

——ピンポン

再び玄関のチャイムの音がした。鈴木はゆっくりとそちらを振り返る。いつの間にか、その体は鳥肌を立てていた。足音を立てることなく、玄関に近づく。そして先ほどよりも幾分警戒心の籠った声で、彼は扉の向こう側へ声をかけた。

「……どなたですか」

覗き穴から見える影はない。しかし、その謎に答えるように小さな声が聞こえてきた。

「こんにちは」

子供のような声。鈴木はじつくりと覗き穴を凝視した。すると、下の方に黒い影がある。小学生くらいの外国人の男の子が、自身の玄関の前に立っているのが見えたのだ。少年の人懐こい笑顔に負け、鈴木はまたしても扉を開けてしまった。

「すみません、人を探しているんですけど」

「どんな子？」

先ほどと同じパターンに、瞬時に鈴木はこの少年も怪しいと感じた。

「この女の子なんですけど」

彼は乾いた指先で少年から写真を受け取った。そして、息を飲む。

写真には、鈴木と優迅が揃って寝ている姿が映っていた。

「……知らないな、確かに、ここと似たような間取りの家だけど、向かいのマンションじゃないか？ここと同じ管理会社が設計をしてるって聞いたことがある」

「そうですか」

どうにかして平静を保とうと努めた鈴木だったが、少年はまったく疑う様子もなく、しゅんとした顔で写真をしまい直した。

「ごめんね、あまりいい情報をあげられなくて」

「いいえ、大丈夫です。失礼しました」

深々と丁寧に辞儀をして、少年はその場を後にした。鈴木は彼が視界から消えるのを見届けると、すかさず窓の方へと向かった。鈴木の家は二階、部屋は窓からこのマンションへ出入りする人物がよく見える位置にある。

しばらくして、先ほどの少年が出てくるのが見えた。鈴木は安堵の息を漏らす。だが次の瞬間、鈴木は大きく目を見開いた。

彼が見ている。少年は明らかに鈴木を見ていた。そして鈴木に向かい、少年はにこりと笑顔を向けると小さく手を振った。

「なっ」

鈴木はすかさずカーテンを閉めた。そして、迷うことなく優迅の鞆を拾い上げると、隣で寝

息を立てる少女の体をゆすつた。

「おい、起きろ！」

「ううう」

寝ぼけ眼であくびをする優迅。そんな彼女に構うことなく、鈴木はその両肩を勢いよく掴んだ。

「お前、もしかして誰かに追われてるのか!？」

「え……」

「だから、お前が過去に来ることによつて、母親じゃない別の誰かが怒る可能性はあるのか」

「え、うん。まあ、確かに。どうして？」

鈴木の中には確信があつた。先ほどの連中はおそらく未来から来たわけではない。写真に写っていた彼女は過去にきてから、こちらの世界で撮られたものだったからだ。

「あ、ちよつと、私の鞆、勝手に開けないで!!」

「いいから、ひとまず俺の服を着とけ。今まで着ていた服は着るな。服なら何でもいいだろ」

「ちよつと、まって。何かあったの？」

「いいから、とりあえず着替えろ」

「パパ!!落ち着いて!!」

その一言に、鈴木はやつと動きを止めた。そして大きく深呼吸をすると、再び優迅へと言い聞かせる。

「とりあえず、着替えろ。そして、逃げるぞ」

「……わかった」

初めて父親の真剣な表情を見た彼女は、黙ってその指示に従った。そして着替えを終えると、そつと鈴木の背中に指をかける。

鈴木はというと、窓の外をもう一度伺い、例の少年が消えたことを確認した。外に出るなら今がチャンスだ。

そう思った瞬間、彼の視界に黒い何か光った。隣のマンションの屋上に立つ一人の外国人。

彼は何かを取り出した。

「この……キチガイ野郎っ」

鈴木は悪態をつくや否や、勢いよく扉を開けて走り出した。

「ちよつと、パパ!？」

「走れっ」

鈴木は彼女の手を引いて、階段を駆け下りる。そして2人がマンションを飛び出た瞬間、彼らの後ろで大きな爆発音が響いた。

「くそっ」

「ば、ばば………どういうこと?」

振り返ると、鈴木たちの目の前には真つ赤な炎に包まれたマンションが広がっていた。あそこに残っていたら、即死していたに違いない。

「ははっ………久しぶりだな、こういう案件は」

遠くの方でサイレンが聞こえる。おそらく、近所をパトロールしていた警察あたりが通報したのだろう。鈴木はぼんやりと、燃え盛る火の塊を眺めていた。何が起きたのかわからない。ただ、震える小さな掌をそっと握り返した。

「走るぞ、あいつらはまだ近くにいます」

鈴木は再び娘の手を引いて走り出した。そんな彼らの背中を先ほどの外国人が追う。

こうして、深夜の逃走劇は幕を開けたのであった。

☆——逃走

「素早いな、まさか逃げられるなんて」

青年は自身の髪を夜風に漂わせながら、口元にさわやかな笑みを浮かべた。そんな彼の手を触る少年。

「どうかしました？ノヴェーラ」

ノヴェーラと呼ばれた少年は、少し気難しそうな顔を浮かべている。

「あの、ベルナルデイさん。ひどいです」

「あはは。仕方ないですよ、僕たちは仕事として頼まれたんですから。このくらい、どーんつといかないと」

「でもまた柳さんに怒られますよ」

少年は小さな頬を僅かに膨らませた。そんな彼を宥めるように男、ベルナルデイは微笑んだ。

「大丈夫ですよ、全部、柳さんが何とかしてくれます」

そういつて彼は、担いでいたバズーカを適当なところへと置いた。

「我々の目標は、未来人の保護であつてこの街の治安維持ではありませんから。協会の連中は色々と言ってくるとは思いますが、まあ柳さんが。ああ、でも僕はイタリア人だからもつ

と上の人が何とかしてくれるでしょう」

ベルナルデイはあつけらかなとした風に言うと、火の手が上がる建物の方へと歩き出した。

「追いかけて、私は得意ですよ」

「それでは、僕は不要ですね。こんな子供の体じゃ、到底適いません」

「ええ、そういうと思って車を用意しておきました。ノヴェーラ、あなたは例の鞆を持っていてください。花火には欠かせないものが入っていますから」

男はノヴェーラに振り返ることはない。少年はやれやれといった様子で立ちあがると、ぽつりと小さくつぶやいた。

「一緒に働いてから一年経つけど、やっぱりあなたはわからない」

「大丈夫ですよ、それが私の魅力ですから。はっはっは」

大きく息を荒げて、鈴木と優迅は走っていた。いや、実際鈴木は少女の体力に合わせて走っている。マンションからここまで走り続けていた少女の体は、まもなく限界が近かった。

「パパ、ちよつと、待って、死んじゃう」

途切れ途切れに訴える声。後ろを行く少女は、今にも足が崩れ落ちそうだ。鈴木は立ち止まると、考える間もなくすぐに腰を落とした。

「乗れ」

「え」

「おんぶして走る」

「い、いやいや、そんなっ」

「早くしろ」

「え、ええ」

ただでさえ早まっている心拍数に拍車をかけるように、少女は顔を真っ赤にしてたじろいだ。だが、時間がないのも事実である。彼女は意を決して、鈴木の中背中に跨った。

「……暖かい」

鈴木は少女を背負って、再び走りだす。

しかし、このままではあつという間に追い付かれてしまうのは明らかである。彼は走りながら周囲を見回した。何か、足になるもの。自転車でも何でもいい。何か乗り物がないかと血眼になって探した。

だが、深夜の大通り。車一つ通らないほど静まり返った道路は、一面を月明かりにキラキラと反射させているだけだった。

ふと、彼らの視界に人口的な光が差し込んだ。それに合わせて不格好なエンジン音が鳴り響く。振り返ると、彼らの背後には一台の車が迫っていた。そして、車内から先ほどの外国人が暢気な声をあげている。

「すみません、ちょっと止まって頂けますか？」

「ふざけんなっ」

車は鈴木たちを嘲るように、のろのろと走っている。最大速度で走ればあつという間に彼らの前に躍り出ることが出来るだろう。しかし、それは軽快なクラクションを鳴らしながら鈴木たちを追い立てていた。

しばらくして、鈴木は道の端に小さな路地裏を見つけた。ここなら車が入る余地はない、そう判断した彼はすかさずその角を曲がる。案の定、車は回り道をして、この先の通りへと迂回した。

「あれは」

疲れ切った鈴木の前に光る鉄の塊。路地裏に駐輪された小さなスクーターが彼らを待ち伏せていたかのように置かれていた。すぐに少女を背中から下ろした彼は、それに近寄る。そして状態を確認すると、迷うことなく車体を叩き始めた。

「パ。パ!? それ、知らない人のやつじゃ」

優迅の制止も聞かず、鈴木はその行為を繰り返す。すると、ものの一分もかからないうちにエンジンが始動した。

「乗れ」

「え、ええ」

「大丈夫だ、借りるだけだ」

優迅がバイクに乗り込む。瞬間、鈴木の手を何か掠めた。

「こらこら、それは窃盗ですよ」

路地裏の出口で、男がミサイル片手に手を振っていた。

「それは、人に向けるものじゃないですよ」

再び引き金に指が置かれる前に、鈴木はアクセルを踏んだ。荒いエンジンを立て、2人を乗せたスクーターが全速力で走り出す。

鈴木が目指しているのは天城の家だ。彼の中で一番安全な場所と言っても過言ではないだろう。しかし、彼らの背後には依然として例の男の車がついてきていた。

「もう一発、撃つてもいいですか？」

「駄目に決まってるだろ」

「では、お話でもしましょうか」

そうやって男は、運転席にいた少年と場所を変わった。ぐんつと一気に速度を速めた車は、鈴木たちの乗るスクーターをあつさりと追い抜き、前に出る。

「こんにちは、先ほどは失礼しました」

「とんでもないご迷惑だ、畜生」

「いえいえ、私も燃やすつもりはなかつたんですよ。ちよつと風を吹かせようと思っただけで」

「とんだ計算違いだな。大体この国にあんな武器持ち込んでる時点で、頭のネジが抜けてるんじゃないのか」

そういつて鈴木は並走する車にちらりと目をやった。

「駄目ですよ、前方不注意は危険ですよ」

「お互い様だろ」

そうですねと、男は頷くと、左手で懐から先ほどの写真を取り出した。

「この少女、あなたの後ろにいる方ですよね？」

「そうだつて言つたら、どうするんだ」

男は何も言わずににこりと笑つた。そして、相変わらず片手運転のまま、鈴木に声をかける。

「自己紹介が遅れましたね。協会から来ました、えつと、そうだな、うん。私の名前はミハイ・ベルナルデイです。そして、隣の少年はノヴェーラです」

ノヴェーラは鈴木に見えるように手を振る。

「やっぱりお前らグルか」

鈴木は少年の顔に目をやった。すかさず、ノヴェーラは体を前に出して注意する。

「危ないですよ、前を見てください」

子供に諭され、鈴木は不機嫌そうな顔で前方に視線を戻す。

彼らは何者なのか、そんなことを考える余裕はない。鈴木はとにかく天城の家に向かうことしか頭になかった。だが、すぐに彼は先ほどの男の発言を思い出す。

「ちよつと待て、協会から来たつて言ったな。協会がどうしてこの子を追っている」
「それは、秘密です」

☆——非常識への招待

風切る音が耳をつんざく。こんなにも猛スピードで公道を走ることはもう二度とないだろう。俺はそう思いながら、グリップを握る手を一層強めた。

俺の腰に回る手は先ほどから緩めることはない。きつく、きつく締め付ける。きつとこの後部座席にある重さだけが、今の俺をここまで突き動かしているのだろう。じゃないと、こんな命がけのレースに繰り出すことは絶対ないと俺自身が確信をもって言える。

「パ。パ。」

このスピードに慣れてきたのか、ふと優迅が俺の耳元に問いかけた。

「あの人たち、何？」

彼女は先ほどから並走している車の男について問いかけた。もちろん、俺があげられる情報は何もない。

「俺もわからん。外国人のストーカーってあたりが妥当だな」

「外国人というよりはイタリア人って言ってください。ちなみに北部の出身です」

そういつて、彼はウィンクを飛ばしてきた。最悪だ、俺の一番嫌いなタイプの人間だ。

「お前ら協会の目的はなんだ？また2年前のノエルの時と同じで、実験か何かでもするつもりか」

「いえいえ、そんな野蛮なことしません。我々は、そちらの未来から来た少女を保護しようと思っただけです」

「保護？」

保護するために、他人の家を爆破したって言うのか、こいつらは。

「まあ、簡単にいえば、協会は現状維持を掲げる集団。未来人なんていう、異分子を回収しに来たということですよ」

「こんな少女が何をするっていうんだ」

「Ego。他でもない、あなたの子供ですから。我々も予測不能です」

俺は久しぶりに聞いたその言葉に、全身が硬直するのを感じた。だが、すぐに我に返る。なぜなら、硬直したままの体が唯一動いている、腰に回された彼女の腕が僅かに振動していたからだ。彼女は震えていた。

「回収だか、保護だか知らねえが、あんたたちの言葉は信用できないな」

「私は紳士です。祖国の名にかけて、彼女に乱暴を働かないと約束します。彼女が元居た時代に帰る手伝いをさせていただけです」

ベルナルデイと名乗った男は、相変わらず不気味な笑みを浮かべている。

「そもそもあなたの手ひとりて抱えられる案件でもないでしょう。協会を信じてください」

「協会……そういえば、日本支部には柳さんがいたな」

「ええ」

俺はちらりとミラー越しに彼女の様子を伺う。相変わらず、腰に回された腕は震えているし、俺の背中に顔をうずめたままだ。俺は息を短く零した。けたたましいエンジン音と風の音だけが聞こえている。

「俺はお前を手放さない、安心しろ」

「パパ……」

俺の言葉に、優迅はより一層俺の背中に顔をうずめた。

「これは残念です、交渉不成立ですね」

「もともとから交渉する気があったとは思えないがな」

俺は目の前に見えた路地に向かって大きくハンドルを切った。咄嗟のカーブにしたと思ったが、向こうの運転技術は相当高いらしい、車はすかさず俺たちの入った路地裏に方向転換をする。

焦る様子も見えない。ベルナルディは余裕の笑みを崩すことはなかった。

「ノヴェエーラ、鞆の中からアレを取り出ししてください。打ち上げの時間です」

その声を聞き、俺はミラー越しに奴らの様子を伺った。少年が鞆から取り出したもの、それは小型のグレートランチャーだった。

「おいおいおいおい、おいつ!!そんなの映画の中でしか見たことないぞ。ていうか、何でそんなもの日本に持ち込めたんだよ」

彼らは俺の絶叫など耳に入っていないのだろう。男は運転席を少年に預けると、その武器を高々と担いで、窓の外へと顔を出した。

「さあ、鈴木聡太。イツツ・シヨータイムです、お逃げなさい」

「もう先生はこの世界にはいないんだらうね」

女はそう言って、悲しげな表情をした。

「そうだな、この世界は俺たちの手で守らないといけない。この街、この世界、未来も現在も」

男はそう言って、彼女の手を抱かれている赤子に手を伸ばした。しかし、何故か触れることはない。

「どうか、この子の未来が幸せであってくれ」

そういうと、男は取り繕うように違う話題へと変えた。

「まずは市役所だな、戸籍を登録しなければ」

「ええ、そうね。名前はどうする？」

二人は考え込むように黙る。そしてしばらくの後、女が口を開いた。

「優迅、鈴木優迅はどう？」

「いいけど、あえて名前を変える必要があったのか？おれは前の名前のままでも好きだけど」

「うん、でもほら。あれは子供の頃の私の我儘みたいなものだから。もうやめようと思って」

そういつて女は微笑む。

「あのお転婆娘がこんな風になるとは、誰も想像できなかったでしょ」

男はその笑顔を見て眩しそうに眼を細めると、再び自身の娘に視線を戻した。もう一度手を伸ばす。それでもやはり、その赤子を撫でることはできなかった。男の中では様々な葛藤が押し寄せていたのだ。

「優迅」

男は娘の名前を呼び、真剣な顔で自身の妻を見つめた。

「なあ、この感じ。葵の時と同じだ。この子は、優迅は、」

「etc」

女は彼の言葉の続きを口にした。

そして、彼らは何も言わずに、すやすやと寝息を立てる赤子を見つめる。しばらくの間、室内は静寂に満ちていたが、やっと男は踏ん切りをつけるかのように立ち上がった。

「役所に行こう」

「この子は？奏に見てもらおう？」

「そうだな、赤子を抱いていくのも大変だしな」

そういつて、男はコートに腕を通す。部屋を出る前に、もう一度赤子へと振り返った。そして、また手を伸ばす。

やはり、男は赤子を撫でることはできなかつた。